

令和4年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(共同制作支援事業)
成果報告書

事業（公演）名	全国共同制作オペラ レオンカヴァッロ歌劇『道化師』 & マスカーニ歌劇『カヴァレリア・ルスティカーナ』
代表団体名	東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
劇場・音楽堂等の名称	東京芸術劇場、愛知県芸術劇場
実演芸術団体等の名称	読売日本交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団
内定額	39,676 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業の概要

趣旨・目的、ニーズ等

- ・19世紀末につくられ、直接的な感情表現が特徴的なヴェリズモオペラの代表的作品『カヴァレリア・ルスティカーナ』と『道化師』を上演する。オペラ初挑戦となる我が国の演出家が新たな視点でアプローチする機会とすることで、全世界的に繰り返し再演されている当作品を今一度見直し、本来の意味での“新演出”による創造発信を行い、西洋から遠く離れた日本人が西洋芸術の継承および発展に従事する意義を発信することを目指す。
- ・当共同制作オペラシリーズの特徴である異ジャンルの演出家を迎え、その作品の本質を新たな視点で追求するという観点で上演を試みる。また、各地域出身者を中心に構成するプロフェッショナル合唱団、児童合唱団と地元のプロオーケストラが出演することで、各地域における芸術文化機会の創出を図り、未来につながる舞台作り、地域間の文化共有機会の均等化を実現する。
- ・日本を代表する若手、中堅歌手を実力本位で積極的に起用し、アーティスト育成も意図することで我が国の音楽文化の底上げの一助となるよう努める。
- ・また各開催地に在住または出身のソリストを起用することで、各地の文化振興に寄与することを目指す。
- ・運営面では各種バリアフリー化、多言語化（*その時点での感染状況による）に出来る限り取り組み、障害者を含む、不特定多数の国民、外国人が来場しやすい環境整備にチャレンジすることで劇場法に則り、各劇場が地域に開かれたアーツセンターの役割を公演を通じ果たしていく。（聴覚障害者向け磁気ループの運用、*外国人向け英語字幕の運用）

実施日時・実施会場（所在地）・実施回数

- ①2023年2月3日（金）、5日（日）東京芸術劇場コンサートホール 主催：東京芸術劇場 公演回数2回
- ②2023年3月3日（金）、5日（日）愛知県芸術劇場大ホール 主催：愛知県芸術劇場 公演回数2回

演目・曲目、幕構成、主な出演者、主なスタッフ、あらすじ等

指揮：アッシャー・フィッシュ 演出：上田久美子

美術：上田久美子（監修：大橋泰弘、コーディネイター：中村友美）、振付：前田清実、麻咲梨乃、柳本雅寛

衣裳：藤谷香子

擬闘：栗原直樹、照明：高田政義、音響：石丸耕一、映像：山田晋平、ヘアメイク：JULIA

衣裳協力：花柳劇団

副指揮：糸原裕介、苫米地英一、リカルド・アラサーテ・ゴンザレス、諸遊耕史

合唱指揮：辻博之 コレペティトール兼、音楽コーチ：岩渕慶子

字幕：まくうち、テクニカルコーディネーター：關秀哉 他

演出助手：喜田健司、振付助手：森川次朗、中谷薫

舞台監督：酒井健（NIKE ステージワークス）

プロダクション・マネージャー：關秀哉

当公演は、主要な登場人物において、歌手とダンサーの2名で一役を表現する、文楽に着想を得た演出で上演される。

各配役は以下のとおり。

〈田舎騎士道〉

トゥリッドゥ：アントネッロ・パロンビ（テノール）／柳本雅寛 サントウツァ：テレサ・ロマーノ（ソプラノ）／三東瑠璃

ローラ：鳥木弥生（メゾ・ソプラノ）／高原伸子 アルフィオ：三戸大久（バリトン）／宮河愛一郎

ルチア：森山京子（アルト）／ケイタケイ

〈道化師〉

カニオ：アントネッロ・パロンビ（テノール）／三井聡 ネットダ：柴田紗貴子（ソプラノ）／蘭乃はな

トニオ：清水勇磨（バリトン）／小浦一優 [芋洗坂係長]

ペッペ：中井亮一（テノール）／村岡友憲 シルヴィオ：高橋洋介（バリトン）／森川次朗

（両演目）路上生活者：やまだしげき、川村美紀子

管弦楽：読売日本交響楽団（東京公演）、中部フィルハーモニー交響楽団（愛知公演）

合唱：ザ・オペラ・クワイア（東京公演）*プロフェッショナルの混声コーラス

愛知県芸術劇場合唱団（愛知公演）

児童合唱：世田谷ジュニア合唱団（東京公演）、名古屋少年少女合唱団（愛知公演）

プロデューサー：今井俊介（東京芸術劇場）、水野学（愛知県芸術劇場）、大島千枝（東京芸術劇場）

事業（公演）の特徴、鑑賞者利用者拡大のための工夫点又は戦略等

●特定の団体に偏らない適材適所の配役を行い、劇場音楽堂が主催する意義を考慮し、我が国の音楽文化の向上を図る。

●開催地の地元合唱団（プロフェッショナル）、地元のプロオーケストラを起用し、協働することで、地域文化に根差した活動の活性化を目指す。またホール地域の文化拠点形成の観点から10年後の劇場の実りにつながるようなことが期待できる。

●各地域の高校生または大学生（東京はアート系の大学生）を事業モニターとして参加募集を行う。その評価を事業報告書作成時に反映し、若い客層のニーズを継続して調査し、中長期的な視点にたって、オペラファンの拡大を目指す工夫をする。

●宝塚歌劇団で演出家・脚本家として絶大な人気を誇る上田氏ならではの創造的で新鮮な『田舎騎士道』、『道化師』に取り組むことで、オペラの新たな客層拡大に繋げる。

●開催地に所縁のあるソリストを起用することで、本プロダクションならではの出演者構成を実現する。

●聴衆向けの関連イベントや情報発信を実施することで作品演出意図への理解を深める機会を創出する。

（バリアフリー・多言語対応について）

●聴覚障害者向けに補聴機能となる磁気ループを稼働することでのバリアフリー化を図る

（東京設置済み、愛知設置可能）。

●英語字幕を作ることで、多言語化を図る。

共同制作を行う劇場・音楽堂等、実演芸術団体
東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団） 公益財団法人愛知県文化振興事業団（愛知県芸術劇場） 公益財団法人読売日本交響楽団 特定非営利活動法人中部フィルハーモニー交響楽団
共催者・協賛者・後援者・関係機関
共催：東京都（東京公演）…共催分担金（主に東京公演のホール代、リハーサル室代金へ充当）

（２）事業の目標値、実績値

実施会場	実施日程	入場者・参加者数	
		目標値	実績値
東京芸術劇場	2023年2月3日（金）	目標値	1,277
		実績値	1,369
東京芸術劇場	2023年2月5日（日）	目標値	1,277
		実績値	1,603
愛知県芸術劇場	2023年3月3日（金）	目標値	1,551
		実績値	720
愛知県芸術劇場	2023年3月5日（日）	目標値	1,551
		実績値	1,107

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p data-bbox="156 309 1185 338">共同制作の意図や役割分担など事業が適切に組み立てられていた（と認められる）か。</p> <p data-bbox="129 360 1466 533">本事業は、共同制作に参加するホール間の連携交流や協働を通じ、劇場制作人材交流（当プロジェクトでのインターンシップを含む）、劇場舞台スタッフの養成を図ることを目的とした。共同制作館である愛知と東京は、常に協議・情報共有をかかさず実施することを基本とし、具体的な作業分担については、両劇場間で協定書を締結し、業務の分担を定め（東京：幹事館/出演者&連絡調整、進行&予算管理、愛知：旅行手配、広報）、予定通りに事業計画を実施できた。</p> <p data-bbox="129 600 1466 819">具体的には、演目や演出家設定の段階から両館で協議し、演出家との打ち合わせ、舞台ミーティング、演出家による指揮者&ソリストへの演出プラン説明にいたるまで、全て両館で対応し情報共有をはかり、制作業務を進めた。また初演地である東京でのダンサー稽古、音楽稽古、立ち稽古、舞台稽古は、全て愛知のスタッフも常駐した。劇場入りしてからは愛知の舞台技術者も参加。稽古場にはインターンシップ含む若手スタッフも起用し、共同制作オペラの「note」を立ち上げ、稽古場レポートを若手スタッフが執筆。若手にオペラ制作現場の経験を積ませる良い機会となった。愛知の劇場稽古には東京も参加。</p> <p data-bbox="129 887 1466 1059">全ての稽古現場を動画撮影し、稽古進行協議メンバーである演出家、演出助手、副指揮、コレペティ、振付師、振付助手の意向を幹事館である東京がとりまとめ、当日中に出演者・スタッフ陣に連絡系統図をもとに共有し、翌日の稽古へと繋げた。連絡系統の役割分担は、ソリスト・カヴァーは愛知、プランナー・舞台スタッフ（演出部）はプロダクション・マネージャー、合唱・児童合唱はそれぞれ各劇場、ダンサーは若手スタッフが伝える仕組みとした。</p>
<p data-bbox="156 1104 999 1133">助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <ul data-bbox="129 1155 1466 2000" style="list-style-type: none"><li data-bbox="129 1155 1466 1375">●助成を受けたことで、東京・愛知の2館がこれまでの知見を生かしつつ連携し、ヴェリズモ・オペラの2作品を斬新な視点で新演出に取り組み、オペラの新たな可能性を探る舞台に挑戦することが出来た。人間の本質に焦点をあて、心の闇や人間模様を描いたイタリアの愛憎劇の舞台を、関西の下町に置き換えて関西弁字幕も加えて表現。音楽的には、世界的なオペラ指揮者、ソリストを迎えて日本人キャストと共に上質な音楽を提供。トップダンサーを歌手と共に配したことで音楽ファンのみならず、ダンスファン、演劇ファンと幅広い層の期待値を高め、オペラ鑑賞の楽しみ及びオペラファンの拡大に繋げた。<li data-bbox="129 1442 1466 1518">●参加地域のプロオーケストラとともに地域の少年少女合唱団を起用することで、地域活性化と地域の音楽文化普及啓発（子供コーラスとして参加した者が将来にわたる芸術体験として）に繋がった。<li data-bbox="129 1585 1466 1711">●稽古現場で、世界的なソリストと日本を代表する若手・中堅歌手、カヴァー歌手が互いにコラボレーションすることで、日本の若手歌手が積極的に指導を仰ぐ場面もみられ、アーティスト育成の観点からも価値があり、今後の舞台出演における表現力向上が期待され、我が国の音楽文化の底上げの一助となったと思われる。<li data-bbox="129 1778 1466 1854">●運営面ではバリアフリー化、多言語化に出来る限り取り組み、障害者を含む不特定多数の国民、外国人が来場しやすい環境整備にチャレンジすることで劇場法の精神に則り、各劇場が地域に開かれたアーツセンターの役割を、公演を通じ果たした。<li data-bbox="129 1921 1466 1998">●経済的にも、約70名のカンパニーメンバーが、公演期間中愛知に滞在することで、宿泊・移動・飲食等への経済効果をもたらした。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

【目標①】参加館の連携や協働を通じ劇場制作人材交流、劇場舞台技術スタッフの養成を図る。

指標：両都市公演に両劇場の制作、舞台技術者が参加。インターンシップも可能な限り参加させる。

実績：2劇場の制作スタッフ3名が2都市でのツアーに参加。愛知の舞台技術者1名が東京舞台稽古から参加。東京と愛知でインターン1名ずつがそれぞれの劇場制作に参加。

【目標②】地域のプロオーケストラ、合唱・児童合唱を起用。地域活性化と音楽文化普及啓発に繋げる。また劇場と実演団体が密接な協力体制を構築。多言語化、バリアフリー化も推進する。

指標：合唱は2劇場合計で60人程度が文化芸術活動に参加。オーケストラは、東京のライブラリアンがとりまとめ。愛知のオーケストラと連携協働を図る。聴覚障害者向けの磁器ループの稼働、字幕の多言語化を図り、英語字幕を稼働させる。

実績：各館48人ずつ計96人が文化芸術創造活動に参加。東京と愛知でライブラリアンの連携協働を図った。ヒアリングループを稼働させ、字幕は、日本語/英語字幕を設置。加えて演出家の意識による関西弁字幕を投影し、日本人が感情移入できるようにした。

【目標③】両館で役割分担を実施。経験値を深めることで、劇場を中心としたアーツセンター機能の活性化の一助とする。

指標：旅行手配館は、出演者、スタッフの連絡を密に直接をとり、信頼関係の醸成を図る。広報担当館は全国共通の広報を代表し行うことで、全国規模での広報のあり方を実践的に修得する機会とする。

実績：制作の統括は東京が担い、旅行手配と広報を愛知が担い、新たに共同制作オペラの「Note」を立ち上げ、両劇場が協働して多彩な情報発信を展開。制作・広報スタッフの人材育成・研鑽の場となり、未来の地域文化発展のための基盤充実に繋がった。

【目標④】複数地域の劇場・音楽堂と実演団体が協働することにより、独創性の高い創造発信につながる最高品質のオペラ上演、地域の文化力を著しく向上させる効果につなげる。

指標：複数の劇場および実演団体が能動的に協働し、国内の担い手をレベル向上させ、持続可能な舞台芸術制作に寄与する。

実績：東京と愛知が本オペラ上演のために協議・協働することで、文化の担い手のレベル向上、持続的な舞台芸術制作に繋がった。

【目標⑤】30代～40代の若手・中堅のソリストを起用し、10年後の日本の音楽界を牽引する若手芸術家の人材育成を図る。将来劇場文化を担う期待の人材を演出家として起用。将来の劇場文化醸成へ向けた人材育成的な側面も見出していく。

指標：30代～40代の若手・中堅ソリストを中心とし、カバーは、20代アーティストを起用し、次世代の担い手育成の場とする。

実績：演出家に上田久美子を起用。30代～40代の日本の若手歌手を起用。20代～30代の歌手7名をカバーとして起用。

【目標⑥】国内で独自に共同制作するフレッシュ且つ最高品質のオペラを、各地で上演することで地域住民に感動と幸福をもたらす。

指標：過去の経験を礎に新しい視点(他分野アーティストによる新演出)で作品に取組み、新鮮な感動を共有する。東京2,600名、愛知3,100名の入場者数を指標とする。

実績：東京公演 2,972名(うち有料2,558名)、愛知公演 1,827名(うち有料1,689名)

【目標⑦】ダンサーオーディションを実施し、舞台出演機会を広く提供。次世代の担い手の育成に繋げる。

指標：オペラ初挑戦となる演出の上田久美子氏による、これまでのオペラ演出の常識にとらわれない新しいクリエイション実現を図る。

実績：ダンサーオーディションを実施。独創的でインパクトのある新演出のオペラ作品に出演の機会を提供。話題性のあるオペラ作品となり、オペラの裾野を広げることに寄与した。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

本事業は、予定どおり東京と愛知で2カ所4公演を実施した。

演目の検討、演出家起用、演出方針の検討、舞台スタッフミーティング、演出家による指揮者&ソリストへの演出プランの説明、ダンサー稽古、立ち稽古、音楽稽古、舞台稽古など、全て東京と愛知で情報共有しながら協働して制作を進めた。稽古期間中に記者会見を実施。広報担当館の愛知が仕切り、多くのメディアに取り上げられた。

新型コロナウイルス感染拡大防止対策としては、稽古場、劇場での検温・消毒の徹底をはかり、体調不良者が出た場合には、自宅待機とし迅速な連絡をとるように対処した。さらに合唱人数について、マエストロの希望により、急遽48名に増員することとなったが、コロナ渦であることを考慮し、合唱をオンステージとオフステージ(2階客席)に分けることで感染症対策を施した。ところが、公演直前の1月中旬に、出演者の一部より、舞台上が密になることによるPCR検査の実施を要請された。周囲では公演中止となった公演も発生していたため、PCR検査を実施し、全員陰性を確認した上で公演を万全に実施した。

あわせて、PCR検査を実施することで、万が一陽性者が出た場合に備え、ダンサーについても急遽カヴァー役を付けて対処した。

共同制作館では、前年の3月に制作会議を実施。以後、2館だったため、適宜情報共有を密におこない、制作業務を進め、共同制作オペラのメディア・プラットフォームnoteを立ち上げたことで、若手スタッフが企画&取材に関わり、多彩な広報展開を東京と愛知で実施した。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

要望書記載の要望額51,193千円に対し、交付決定額は38,894千円だったため、12,799千円という事業費削減に対する大きな努力が必要となった。

しかし演出方針もすでに固まっており、努力をして切り詰められるところはコスト削減をおこなったが、助成対象経費額は要望時102,387千円、申請時107,350千円に対し、決算時では121,342千円となり約119%の増加となってしまった。

出演者増加に伴い、旅費の増大や出演料の増加、演出部の人件費増加、ダンサーの着地音対策での舞台費増加や音楽スタッフのやむをえない増員や通訳の増員など、演出家や指揮者と交渉しつつも創作意欲を落とすことなく前進することの難しさ、2作品のオペラを同時に制作する大変さを痛感することとなった。

(4) 創造性

自己評価

我が国の実演芸術水準を向上する牽引力となることが期待できる国際的水準の公演であった（と認められる）か。

本公演は、19世紀のヴェリズモ・オペラの代表的作品「田舎騎士道」（カヴァレリア・ルスティカーナ）と「道化師」の2作品をとりあげ、新たな視点でアプローチする“新演出”で創造発信に取り組んだ。直接的な感情表現が特徴的な、閉ざされた世界で起こる市民の愛憎劇を、元宝塚歌劇団の人気脚本・演出家である上田久美子に演出を依頼。人間模様を深い洞察力で描く上田作品は、観客の心を掴み離さないことで定評がある。そのような上田氏によるオペラへの初挑戦は、発表当初より多方面から多くの期待が寄せられた。

ひとつの役を歌手とダンサー2人で演じる文楽から想を得た手法に加え、設定をイタリアから異なる時代の関西に読み替え、役名もイタリア（歌手）と日本（ダンサー）の両立でおこない、歌詞のイタリア語の日本語訳・英語訳に加えて、舞台上の装置に関西弁意識を映し出し、ダンサー役の心情を表した。これによりカトリックの宗教的な背景が奥底に存在する物語が、日本人にとってより身近で親近感を帯びて感情移入ができるようになり、多くの反響を呼んだ。「私は道化師が好き」「いやいや僕は田舎騎士道の方が好きだ」「あの人のダンスが凄い」「あの歌手の声は凄かったな」「あの場面が好き」など、賛否両論ありつつも、従来のオペラファンから初めてオペラを観た層にいたるまで、活気ある感想の語り合いが生まれた。

指揮者には世界的なオペラ指揮者のアッシャー・フィッシュを迎え、読売日本交響楽団（東京）と中部フィルハーモニー交響楽団（愛知）とで上質な音楽を提供。シンプルな舞台装置は、音響反射板の役割も果たし、音楽的にも価値ある演奏となった。

また広報面では、共同制作オペラで、メディアプラットフォームのnoteを立ち上げ、若手スタッフやインターンも参加し、若手の発案も取り入れ、出演者インタビュー、インターンによる稽古場レポート等、計18本の記事を投稿。ツイッターでも「初日まであと何日」と題し、1役を演じる歌手とダンサーが対となって日替わりでコールすることで盛り上げ、東京公演2日目を完売へと導いた。多くの事業PRに工夫を重ねて実施した経験は、今後の芸術文化の担い手育成にも大いに寄与した。

この2作品を同時に歌うテノールは世界的にも数少ない。2演目歌ったテノールのアントネッロ・パロンビは、『田舎騎士道』は初役であり、この2作品に挑戦することがいかに世界のトップクラスの歌手であっても難しいことか、稽古の段階から周囲も理解し、万全のサポート体制を整えた。加えて他の歌手陣もダンサー陣も、異なるジャンルのアーティストと密度濃く2人で1役を演じることは初挑戦であり、新たな観点で両者にとって大変刺激となった。また、世界的トップクラスの歌手陣とカヴァーも含めた日本の若手歌手陣との接点の場が出来たことで、稽古場で指導を仰ぐなど、アーティスト育成の観点からも価値があった。これらの全てのクリエイションは、我が国の芸術文化の担い手の底上げの一助となり、劇場の目指す新たな文化の創造・発信の役割を担えた。

共同制作オペラで2作品を同時制作するのは初めての試みであり、且つ2人で1役を担うということも初挑戦で、プロダクション・マネジャーを中心に連絡体制を図り、制作陣も東京と愛知と連動し、連日連夜情報共有し、反省点を振り返り都度修正し、演出家、演出助手、舞台監督、各プランナーや振付師、音楽スタッフ、通訳に至るまでカンパニーのチームが一丸となってコロナ渦で両演目に取り組み、高い目標にチャレンジ出来たことは、この文化庁の支援なしには成し得なかったことである。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながった（と認められる）か。

当事業の取り組みについて、有識者による批評、来場者の反応の一部を下記に列挙する。これらの反響から、当事業の実施が当該劇場・音楽堂等への国内外での評価の向上に繋がり、各劇場・音楽堂等のミッション達成の一助となった。

マスメディア、業界専門誌への掲出数 127 件（全国 75 件、東京公演 16 件、愛知公演 36 件）を達成し、来場者アンケートからは、東京 81%、愛知 76%という高い満足感を得たことがわかり、賛否両論はありつつも、反響の大きい高水準な公演だったと考えられる。

今後も計画的なオペラ制作・上演に向け、全国の劇場・音楽堂等と連携を進め、互いのノウハウを共有し、我が国の実演芸術水準を牽引する高水準な作品を継続的に共同制作することで、全国の劇場スタッフの制作能力のスキルアップの機会提供及び新たなオペラ人口の拡大に繋げていきたいと考える。また新設の劇場や参加歴のない地方劇場等でも気兼ねなく参加できるよう配慮を重ね、全国の劇場との広域なネットワーク構築に向け努力を重ねていきたい。

○マスメディアへの露出

「ダンサーと歌手陣が一分の隙もない緊密な共演をみせつつ、場所も時代もワープして、二つの世界が軋みながら、俗っぽい人間の心の闇へと降りていくのだ。この軋みをスパイスに、あらゆる動きを秒単位で設計し、歌手とダンサーが自然な絡みを見せる。いわば通常の 2 倍を超える情報量。この美しい音楽が描いているのは、あなたたちの物語だと迫りくるエネルギーに圧倒された」

（以上、朝日新聞夕刊 2月16日 白石美雪）

「上田は宝塚歌劇団でキャリアを積み、クラシック音楽界とは縁のなかった人。オペラにつきものの視聴覚の疎密という不均衡を解決せねば、わざわざ乗り出す意味はないと考えたのだろう。2人1役で目と耳の両方をお腹いっぱいにする、大胆な手を仕掛け、見事に成功させた」

（以上、朝日新聞朝刊 3月17日 片山杜秀）

『ウエクミオペラ』という新ジャンルの誕生と断言。一つの役を歌手とダンサーの二人で演じる、見る者を飽きさせない舞台を作り上げた」

（以上、中日新聞5月2日 築山栄太郎）

○音楽業界専門誌でのレビュー（抜粋）

「全国共同制作オペラでは、いわゆるオペラ畑ではない異ジャンルのクリエイターを演出に起用し、どちらかといえば演出家がオペラに寄り添う形で成果をあげてきたが、上田久美子の演出は、既成のオペラに対する挑戦状のようなものを感じられた。彼女にはぜひ、別のオペラの演出を手掛けてほしいと思う」

（以上、音楽の友4月号 山田治生）

「オペラはもちろんのこと、舞踊・演劇・ミュージカルも含めて、最近の公演でこれほど思い切った挑戦をして、ほとぼりするようなエネルギーに転換できた舞台があったらどうか。こんなふうにして『ハイアート』とされるオペラは既成の殻をいさぎよく破り、現代を呼吸し、“骨董品”となることなく生き延びてゆくのだ」

(以上、ダンスマガジン 2023 年 5 月号 石井達朗)

○劇場会報誌でのレビュー (抜粋)

「芸術という権威的なお題目を前に、オペラというアートが失いかけていた命のありかをあらためて突きつけた。歌手ばかりではなく、ダンサーやお笑い芸人までが自在に集うユートピア。音楽を軸に、当代最高のアーティストたちの感性を束ねる究極の精神の共同体として、オペラを再生する。音楽業界の住人だけでは決してなしえない「革命」だった」

(以上、愛知芸術文化センター会報誌「AAC」vol.116(2023年6月1日発行号)公演レビュー 吉田純子)

○アンケートの反応

【東京公演】大変良かった 46% 良かった 35% 両方合わせて 81%の満足度

- ・はじめてのオペラ鑑賞でしたが、古典作品の普遍性を大衆にもわかる形で大胆に演出されており、楽しめました。楽器の音色に負けない歌手の声量、ダンサーの動きに圧倒されました。
- ・コンサートホールならではの音の響きとコンサートホールなのに見事に設計された美術と演出でとても楽しめました。
- ・成功第一の立役者は、フィッシュ指揮読売日本交響楽団の演奏の素晴らしさ。第2に歌手や合唱の充実。演出の関西弁字幕は絶妙。印象に残る公演はみな「ホール・オペラ」なのは偶然か。

○学生による事業モニター)

・鮮烈な演出と情報量の多さに戸惑う観客も多かったが、緻密な日本文化への落とし込みと大胆な切れ味をもつ新演出は、伝統的な王道のオペラ演出を「現代の芸術」として昇華させる挑戦的な制作活動であったといえる。異分野の作り手が協働し、恐れずに新しいことを生み出す創造力は、劇場の目指す新たな文化創造・発信ろ行う拠点としての役割を担っているといえ高く評価できる」

【愛知公演】とても満足・満足 76%

- ・今回の演出は、とてもユニークで舞台作品として純粋に楽しめた。その上で作品の世界観は壊すことなく、さらには過去の作品ではなく、今。現在、私達の暮らす世界トリンクさせつつ、西洋文化としてのオペラを異文化では無く、身近なエンターテインメントとして見せる(聴かせる)演出に驚き、感動しました。
- ・圧倒的に音楽が素晴らしいということが今更ながら分かった。だからこそ大胆な演出をしても揺るがないということがはっきり分かった。
- ・他にはないオリジナリティを感じました。遠い世界のオペラの話が、身近にグイグイ迫ってくるような、感情を揺さぶられる迫力がすごかったです。

○学生モニター協力

・オペラは堅苦しく、演出が変わることも少なく固定客の獲得が難しいと聞いていたので、勝手な固定概念を壊す良い機会になりました。

以上